法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

# 八重山諸島の平家伝説と倭寇の行跡

宮良, 安彦 / MIYARA, Angen

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
28
(開始ページ / Start Page)
259
(終了ページ / End Page)
289
(発行年 / Year)
2002-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002571

Hosei University Repository

# 八重山諸島の平家伝説と倭寇の行跡

宮良　安彦

はじめに
1　前期倭寇の行跡
東アジア地域と前期倭寇
(1)前期倭寇の始まり
(2)中国（元・明）と前期倭寇
(3)朝鮮（高麗国）と前期倭寇
(4)日本国と前期倭寇
(5)前期倭寇の終焉

Hosei University Repository

2平家伝説と後期倭寇の行跡
1奄美・沖縄諸島の平家伝説と後期倭寇
(1)奄美諸島の平家伝説と後期倭寇
(2)沖縄・先島諸島の平家伝説と後期倭寇
2八重山諸島の平家伝説と後期倭寇
(1)石垣島川平村の平家伝説と後期倭寇
(2)石垣島真栄里村の平家伝説
(3)石垣島のその他の村々の平家伝説
(4)西表島（西部）の後期倭寇の遺跡
(5)竹富島の平家伝説と後期倭寇遺跡
(6)黒島の英雄伝説
(7)波照島の英雄伝説と後期倭寇
(8)与那国島の平家伝説と後期倭跡と島の英雄
おわりに



## はじめに

比較文明学者梅棹忠夫は『文明の海洋史観』の著者川勝平六との対談で大陸中心の梅棹史観を海の視点から補強し「海はつなぐものであり、決して隔てるものではないことは明らか。英国、日本など、海に囲まれた国々が発展してきた」と述べている（注1）。

（注1）二〇〇一、四、二六、沖縄タイムス

このことは海に囲まれた島国である奄美諸島や沖縄諸島や先島諸島についてもいえる。

沖縄諸島へ渡来したと伝承されている文化英雄の一種と考えられる平家一族も、倭寇の集団も海の彼方から渡来した。八重山諸島には石垣島川平村真栄里村、その他の村、竹富島、与那国島等に平家伝説が伝承されている（注2）。

（注2）沖縄本当には源為朝伝説があり、これらの伝説中にも倭寇行跡が投影されているかもしれない。

日本中世文学の研究者永積安明は奄美、沖縄諸島、先島諸島を含めた日本全国に伝承されているこ

Hosei University Repository

れらの平家伝説は史実にあわないものであると指摘している。

これらの倭寇は時代的に前期倭寇と後期倭寇とがある。後期倭寇は沖縄諸島、特に先島諸島を根拠地として活動していたとみられる。

この論文では八重山諸島の平家落武者伝説と倭寇の行跡について先人の研究業績を整理し私なりの考察をくわえたいと思う。

## 1　前期倭寇の行跡

### 東アジア地域と前期倭寇

#### (1)前期倭寇の始まり

一三から一六世紀すなわち室町末期から安土桃山時代にかけて中国、朝鮮の沿岸を日本人が略奪したことに対する中国、朝鮮側からの呼称を倭寇という。倭寇は瀬戸内海、北九州の海賊が中心で、元来は私貿易が目的であった。

倭寇の始まりは『明史太祖記』によると一三五〇年捕逃の徒、海島の間に隠れ、乱に乗じて国禁を犯し、中国（元・明朝）や朝鮮沿岸の地に現れ、官廟を焚掠し、財貨を掠奪して年々漸く猖獗すると



記録されているのがその始まりであるとされている。

その後、朝鮮では毎年沿海の諸群が倭寇のために苦しむようになったが、中国ではそれ以前に数度におよぶ倭寇の記録があるという。

倭寇時代は前期倭寇と後期倭寇時代から成立している。前記の倭寇は前期倭寇時代の記録である。奄美諸島および沖縄諸島、先島諸島が倭寇に侵略されるようになるのは後期倭寇時代においてである。

#### (2)中国と前期倭寇

中国の古文書『島夷志』の記録では倭寇が中国の元朝の遺臣と結んで中国の明朝を撹乱しようと計画したことが推察される。これは倭寇が中国の元末期の擾乱に乗じて中国大陸に活動の目標をおいていたからである。

前記の『島夷志』の記録にあるように中国の明国の高祖が璽書を送って日本に倭寇禁遏を懇請しているが中国の山東・江蘇浙江、福健等に対する倭寇は依然として絶えることはなかった。

『島夷志』（異称日本伝、中巻、八、日本考）や『高皇帝御製之集』等の記録は日本国の征西府が中国の明国から倭寇禁遏に対して来た国書に対して征西府が陳謝することなく、むしろ危険を犯して倭寇と一戦を辞せずとする態度は征西府と倭寇との親近関係を示している。

Hosei University Repository

### (3)朝鮮（高麗国）と前期倭寇

朝鮮の倭寇に対する被害は一二〇〇年代からあり、朝鮮の方が中国よりまだ早くから侵攻が行われていた。これは地理上からみても朝鮮は中国よりも日本国に近いことからもうなずけることである。

『国朝献徴録』第一〇巻「朝惟庸伝」や横井時冬『日本高麗史』の記録によると朝鮮の高麗国は多年倭寇の侵略をうけて国力が疲幣していたとある。

『島夷史』や『日本国考』や『明政統宗』の記録によると朝鮮の疲弊に失望していた倭寇は中国の元朝末期の騒乱に便乗して中国にそのほこさきを転じていたようである。

『高麗記』の記録から九州探題が征西府と倭寇の関係を察知して対征西府との戦いを有利にするために朝鮮国との連係を策したと思われる。すなわち九州探題が朝鮮に使いを派遣して親交をはかり相提携して倭寇の対策に当たったと思われる。

朝鮮に対する倭寇について見逃してはならないことは倭寇の兵団組織の件である。倭寇は数十隻から数百隻におよぶ大船団をもって組織され、倭寇の陸上の部隊も歩騎の精兵数千という大部隊で滞在期間も数カ月におよび、時には一年余にわたって駐留したことも考えられる。倭寇は長い間の戦場経験をつんだ武士国であったと考えられる。



### (4)日本国と前期倭寇

『高麗記』の記録によると倭寇軍は九州肥前国松浦半島を根拠地として壱岐、対馬を経て活躍していた。

九州上下松浦郡は倭寇の根拠地であった。松浦両郡は古来松浦一族の所領地で、領主松浦定は一三三一（元弘二）年後醍醐天皇の綸旨を奉じて以来、つねに菊地氏と結んで征西府の両翼として勤皇のために活躍していた。

この松浦氏がその所領松浦郡を根拠とする倭寇に対してこれを禁止しようとする方策を講じていなかったことは両者の親近感を示すものである。また朝鮮に対する倭寇の勢力および指揮統制の上にも松浦氏のような強力な諸侯の後押しがあったと考えられる。

征西府側の諸侯と倭寇との親近関係に対して九州探題側が倭寇と征西府を同一体の力として仇敵視していたようである。

九州における征西府の勢力は一三五九（正平一四）年筑後川の戦勝から一三六一年には太宰府に征西府を移して全九州を風靡するかのごとき勢力を示した。今川貞世が九州探題として常駐すると室町幕府の大内、大友、小弐、一色、島津等大諸侯の勢力を圧して優勢を示した背後には征西府方の菊地、松浦の軍勢と表裏一体をなす海上勢力があったからである。彼等は九州肥後においては松浦半島を根

Hosei University Repository

拠として壱岐、対馬におよび九州肥後においては天草を拠点として東支那海から朝鮮海峡にいたる海域に海上権を掌握していた。

征西府と倭寇がまったく同一の計画と利害にあっており、当時朝鮮および中国沿岸を焚掠して暴威をふるっていた倭寇と征府とは相互援助の関係にあったのである。

(5)前期倭寇の終焉

のちに一三九二年後亀山天皇の京都御遷幸によって南北騒乱が終熄したので征西府の勢力も名実ともに衰え、このことが倭寇にも大きな影響を与えることになり、東支那には室町幕府の勢力のもとに平和的対中国明朝との貿易関係が結ばれることになったので倭寇は影をひそめるようになった。

一四〇一年室町将軍足利義満は僧祖阿と商人肥富を明国に派遣して国交を回復した。これより室町幕府側の雄藩と称せられた大内、細川、島津等の海上勢が現れるようになった。こうしてかつて征西府側として東支那海の征海権を掌握していた菊地、松浦氏等の勢力は次第に衰え、征西府側の将士のある者は従来の縁を頼って倭寇に投じ、海外に亡命することになった。しかし長いあいだ培われたその海上勢はにわかに衰滅したのではなく、彼等は漸次南下して、室町幕府の勢力のおよばない遠隔の琉球諸島に走り、ここに彼等の根拠地をさだめて、中国および東南アジアに対して倭寇をなし私貿易をしてここに前期倭寇の終焉をみるのである。



## 2　平家伝説と後期倭寇行跡

### 1奄美、沖縄諸島の平家伝説と後期倭寇

(1)奄美諸島の平家伝説と後期倭寇

京都で全盛をきわめた平家一族は源氏一族の勃興とともに攻められ、京都から一の谷へさらに屋島へと逃れ一一八五年の壇の浦の戦いで平家一族は滅亡した。

平家の一部は豊前、豊後を経て日向の五カ庄に入り、あるいはさらに追われて薩摩大隅を経て、南西諸島に落ちのびた。

ここに平家伝説が発生・成立する要素が成立するのである。

すなわち、平盛久の墓は屋久島に、平資盛の墓は大島東間切に、平有盛の墓は大島大村にあるという(注1)。その子孫は隆南七島に繁栄し、代々郡の役人を勤めたという。またその頃沖縄本島にいた源為朝の子孫が日高氏と名乗っていたのを聞いた平氏は小松氏と名乗っていたのを改めて源為朝の子孫とおなじ日高氏と偽称し沖縄本島にひそかに行って親しく交わっていたという(注2)。

Hosei University Repository

（注1、2）田山花袋『日本勝地誌』第十一巻「琉球国之部」

弊原旦『南東沿革史論』によると竹島、硫黄島、黒島、口之永良部、中之島、臥蛇島、平島、宝島、大島に平家伝説がその遺跡をとどめているという。

島袋源一郎『沖縄歴史』によると奄美大島の諸屯には平重盛の子平資盛の墓とその霊をまつった大屯神社があり、西間切、屋嘉内間切はその領邑であったという。また平有盛は名瀬笠利両間切を領して浦上に城を築き、平行盛は古見住用両間切を有して戸口に城砦を築いていたという。今も同地には行盛城や行盛神社があるという。

(2)沖縄・先島の平家伝説を後期倭寇

（2－1）弊原旦は前記の著書で沖縄本島内にはなんらの平家伝説もないと述べている。これは当時沖縄本島には源為朝の子孫である舜天等が勢力を持っていたから平家の南島落ちのとき多くは危険を避けたためだろうと述べている。

なお奥里将健は『沖縄に君臨した平家』で平家は壇の浦で滅亡したのではなく、南走して琉球の支配者となったと述べている。そして舜天は安徳帝かあるいは平家中から擁立された国王であると述べている。ここでは源為朝の島流し伝説と首里王国の成立と平家伝説が重なりあっている。



弊原は沖縄本島内には平家伝説の何らの跡もとどめていないが八重山諸島中の石垣島、与那国島等にはその遺跡をとどめていると述べている。

島袋源一郎『沖縄歴史』によると源平時代、平家の落武者が宮古島の北部狩股に漂着したという口碑があり、現に同地の旧家には一鞘の古刀を保存していると述べている。これは前記の石垣島や与那国島の場合と同様倭寇の行跡を平家伝説にとりかえたものだと思われる。

（2－2）尚真王の跡を継いだ尚清王の時代は日本本土は戦国時代で世の中は乱れ、海上では倭寇がはびこって中国人から恐れられ、その恐怖につつまれていた。

次の尚元王時代も冊封使一行がこれら倭寇の出没のため来島が遅れた。尚清王は社会不安を解消し、沖縄を倭寇の被害から守るために万一に備えて軍備を組織する体制をとった。やらざ森城石碑にはそのことの事情が刻されている。やらざ森城は那覇市垣花（カキヌハナ）にあり、現在は軍用地であるが対岸の三重城（ミーグシク）とともに那覇港の入口にあって倭寇を防ぐためのものであった。

（2－3）倭寇の影――勝連城

岡田輝雄は一九九九年十二月二〇日の琉球新報で沖縄本島の勝連城と倭寇の関係を次の様に記述している。以下の文章はそれからの引用文に一部修正を加えたものである。

一四世紀後期から十五世紀前記が、勝連城の最も繁栄した時代で、茂知附按司（もちづきあじ）や阿摩和利が活躍した。瓦葺きの殿舎が建てられたのもこの時代であろう。大成王の五男から数えて茂知附按司は九

Hosei University Repository

代目、阿摩和利は十代目ということになっている。

茂知附按司な素性はよくわからない。茂知附はすなわち「望月」でもあって、勝連のおもろに出てくるが、その名から受ける印象は、大和系を思わせ、倭寇の流れではなかったかともいわれている。勝連城のおびただしい交易品片の中には、中国（明）が海禁令を敷いて、冊封を受けた王府以外の私貿易を禁じた中での十四世紀後期以降の陶磁器類も大量に出てくる。王府が琉球内で流通網を築いていたことも考えられるが、また、東シナ海を縦横に駆けていた海賊倭寇の影も背後にちらつく。

この時代、琉球は倭寇と密接な関係を持っていたらしい。察度王や尚巴志ら中山王たちが倭寇が捕らえてきた朝鮮人らを積極的に買い上げて朝鮮に送還し、見返り貿易を進めたことや、尚巴志王などは朝鮮への王使を、那覇に貿易に来た対馬の倭寇の頭領の船に、便乗させたりしていたし、その後も首里王府は那覇港にやって来た九州の海商を、琉球国使として朝鮮に派遣したりしていた。

彼らの正体は対馬船のように、倭寇もしくは背後で倭寇と通じた者たちだったともいわれている。

彼ら海商たちは、京・鎌倉にもたとえて繁栄を誇っていた勝連にも、寄っていたのではあるまいか。

いやあるいは勝連自体が直接、大和との貿易はもちろん、倭寇のように中国との密貿易を展開していたかも知れぬ。おもろに道の島（奄美諸島）を、縦横に往き来していた勝連船のことが歌われている。勝連はまさに、海をわが庭と駆け回っていたのだ。



## 2 八重山諸島の平家伝説と後期倭寇

### (1) 石垣島川平村の平家伝説と後期倭寇

牧野清『新八重山歴史』では八重山諸島には平家の落武者の遺跡（墓）だと伝えられている所が四か所あり、川平村のザンドウの洞窟がそうであるという（注1）。

（注1）川平公民館編『川平村の歴史』では前記のザンドウを「ザンドウの岩窟」と記し、そこを「屋島墓」と呼び伝えられていると記述されている。

牧野はさらに前記の著書で石垣島川平村の南風野英助氏談と称する平家落武者伝説を次のように記述している。

甲冑を着けた騎馬武者一平家の落武者は、川平石崎のガバラという地点から上陸したが、ウラダ山に薪取りに来た女達が、頭の上に大きな薪を載せて行くのをはるかに望見して人食人種と判断。精魂つき果てていたこの人達は絶望して集団自殺した。しかしその内一人だけは生き残って、とも

Hosei University Repository

かくも部落を尋ねて見ようと決意して、村にやって来てついに住みつき、妻をめとって二人の男の子を生んだ。この子の内の一人が、後世川平の酋長となった仲間満慶山英極（なかまみつけーまえいさとく）の先祖である。生き残った平家の落武者のことを川平ではヤマトゥウフシュ（大和大主）という名で伝えている。然しこの大和大主は生子二人の養育を妻に頼んで、大和から迎えに来た船で帰って行った。

稲村賢敷は『倭寇史跡の研究』で石島英文の『英傑仲間満慶山伝』から引用して、満慶山の父は戦乱の日本から渡来して川平村に居住した人であり川平村に伝承されている「ばしぃぬとぅりぃゆんた」中の「やまとぅかい、とぅびつき、やすらりぬ、ふん（国）、まいちぃき」というのは満慶の父およびその長男が無事に祖国日本に到着するようにと仲間サカイの祈願をこめて謡ったものだとしている。

そして「やすらりぬふん（国）」は熊本県八代地方のことであろうと思うと述べている。

仲間サカイの夫が熊本県八代地方の者であり、征西府くずれの武士であり、後に南海に浮かんで倭寇の仲間に入った者であろうとしている。

(2)石垣島真栄里村の平家伝説と後期倭寇

石垣島真栄里村にある安居御嶽（アングンオン）は村の南方にある黒島から真栄里村に来た安居大主の弓の練習場であったその跡だという。黒島の東筋村にアングン家の屋敷があったという（注1）。安居大主にはたくさんの家臣がいて、黒島の小さい島にはおれないと石垣島に来たという（注2）。石垣島登野城村の南海岸にあるサクラングチを源氏の襲来の見張り場にして彼は真栄里村に来たという（注3）。そして浜端（はまばた）家の女を嫁にしていたという（注4）。

（注1、2、3）石垣市真栄里安富キク氏の御教示。

（注4）牧野清『八重山のおたけ』。

最初彼は源氏が来るのを恐れておもと山に避難していたという。おもとのナナンガーラに来てそこで避難していたという（注5）。

（注5）注1におなじ。

その後彼はカードーのそばにあるムトゥジィという所に来て農業を営み、海産物を採取して生活をしていたという（注6）。

（注6）ムトゥジィにはムトゥジィオガンがあり、そこのガジュマルの下には香炉があり、小波本家の女性が拝んでいたという。

それから更に平得村の北方にあるチソコバリィに来てチソコオガンを建て、トウ、ヤマトウ、リュウグウへの遙拝所を建てたという（注7）

（注7）注1におなじ。

一九七一年石垣島真栄里村にある安居御嶽の神司安富（やすとみ）キク家に臨地調査に行ったとき安富キクの邸

Hosei University Repository

宅の一番座敷の床の間に掛け軸が二幅あり、東側のものには上方に正一位清盛大神と書かれていて、その下に甲冑姿のカラーの平清盛の肖像画が描かれていた。その西側の掛け軸には正位平重盛大神と書かれていて、その下に平安（平常）姿のおなじくカラーの平重盛の肖像画が描かれていた。そして、平家が戦をする時は兵庫県にある平家の先祖である川平稲荷大明神を使って戦いをしたと安富キクは私に語ってくれた。

一九七七年十一月永積安明と八重山諸島の狂言の臨調査で石垣島に滞在した時、私は永積安明と真栄村の安富キクを訪問し、同氏から平家の話を聴取した。

その時永積安明は平家落人伝説は日本各地にあるが実際は事実とは異なると私に話した。

石垣島真栄里村の安富キクの伝承する平家伝説も恐らくは史実とは異なり、恐らくは倭寇の石垣島真栄里村への行跡の一つだと考えられる。

(3)石垣島のその他の村々の平家伝説

牧野清はさきに『新八重山歴史』で八重山諸島には平家の落武者の遺跡（墓）だと伝えられている所が四か所あると述べていて、その中の石垣島川平村については前述した。

石垣島にはその他、平久保村にはカーラマタの岩窟、桃里村のマンゲー岩窟がそうであるという（注1）。



これらはいずれも大和墓または屋島墓とよばれ、昔は古い人骨のほかに馬の鞍などもあったという（注2）。

これらの遺跡は実は史実とは異なるもので、実際には後期倭寇の行跡であり、それが民間伝承の中で平家落武者伝説になったものだと考えられる。

（注12）牧野前掲書。

(4)西表島（西部）の倭寇遺跡

西表島には平家伝説はないようである。

西表島の倭寇遺跡について稲村賢敷は『倭寇史跡の研究』で西表島西海岸の仲良港の港口にある外離（ばなり）島、祖納半島、星立岬の三か所に倭寇遺跡があると指摘している。

稲村は前記の著書で西表島祖納村における倭寇遺跡のおこりは錦芳姓の始祖慶来慶田城用緒（けらいけだぐすくようちょ）であるとしている。

慶来慶田城用緒は初め外離島に居住しており、往昔ここは難攻不落の天険であり、倭寇の居住地としては最適地であったと同書で述べている。

Hosei University Repository

### (5)竹富島の平家と後期倭寇の遺跡

次に掲げる文章は上勢頭亨『竹富誌』(民俗・民話篇)所収の平家落武者伝説の全文に一部修正を施したものである。

今を去る七百年前、文治二年の海での合戦に追われ、壇の浦に落ちのびた平家の武者、赤山王(アカヤマ)が流れついたところが竹富島の美崎(ミシャン)(地名)であった。赤山王は島にたどりつくと、美崎に洞穴をみつけて住んでいたが、いつしか部落民とも親しくなった。

赤山王が島に持って来たのは、一振りの剣と金製の碗、百合の花形の盃であった。剣は現在墓所に納められていると伝えられているが、碗と花形の盃は行方がわからないと言われている。赤山王はその後、対敵について研究し、島の中央に大岩があるのを見つけてその上に登り、島を見渡せる所に住まいを造って部落の安全を計った。この岩山を赤山(アカヤマ)岳と名付け、島の要所にした。その外、白山(シラヤマ)と、与那山(ユナヤマ)を造りその周囲にクバの木を植えた。その三つの岳を結ぶ道を鍋道(ナビドール)路と言った。

島の古老たちが謡っているクバヌウディと言う童謡はこの三つの岳を謡ったものである。

現在でも島の美崎には赤山王の墓が残されており、その子孫が赤山岳のそばに住んでいるが、太祖赤山王の霊は仏壇とは別にして祀られて、子孫が年に二回、春秋の大祭を盛大に行っている。

初代の墓をヤマトゥウシュヌマイヌハカ(大和御主前の墓)と言って祀り、その子孫の命名に大和の童名が多いのは、赤山王にあやかるためである。

以上の記述は竹富島における平家伝説である。

司馬遼太郎は前記の話を鎌倉初期の平家の英雄伝説だと著書『沖縄・先島への旅』で記述している。また室町期に東シナ海を往来していた倭寇が竹富島に流れつき、島の高所に見張台を作って居住した伝説もあると記述している。

司馬の著書では平家伝説と倭寇との関係は明らかにされていない。

稲村賢敷は『和寇史跡の研究』で竹富島の倭寇について次のように述べている。

竹富島の仲筋(ナーグ)村にある仲筋御嶽の願い口にある「なーるがに」は良懐(ながかね)の転訛であるとして、その語は「あかりなーるかに」すなわち征西府将軍懐良親王あがりなら(日本国王)なりかね(良懐)の名をもって当時東支那海上にある諸島に知られていた方に御霊を勧請して祀ったものであろうとしている(注1)。

(注1)稲村同書三〇八ページ。

また、竹富島の小波本(コンドウ)御嶽の後方は小高い丘になって標高約四八メートルで同島の最高の地点であって、通称ンプフル(牛岡)と呼ばれている。このンプフルは竹富島における唯一の倭寇居住地であったとし(注2)。そこの居住者が小波本ふしがーらと称する日本人であることはその名称によって明らかであるとしている(注3)。

Hosei University Repository

（注2、3）稲村同書三一〇ページ。
小波本御嶽、クースクバー拝所等に至る約七〇〇坪ばかりの所は竹富島内のおける唯一の倭寇居住地であるという（注4）。
（注4）稲村同書三一二ページ。

(6)黒島の英雄伝説

（6－1）黒島の村々の成り立ち

黒島の英雄伝説を記述する前に黒島の村々の成り立ちについて記述する。
黒島で最初にできた村はアーザトゥ村でこの村からヤマサキ村とハイフタ村が分村し、その後ンギストゥ村、ナハントゥ村、アンナン村、イリバラ村の七か村が創設が創設されたという（注1）。
明和の大津波後、海岸近くの村々は被害を受けたので、上記の村々は保里（ブリ）村、東筋（アレスン）村、仲本（ナハントゥ）村の三村に統合された。以後黒島は保里村、仲本村、保慶（フキ）村の五か村になった（注2）。
仲本村は明和の大津波後、前記のアーザトゥ村、ヤマサキ村、ハイフタ村、ンギストゥ村、イリバラ村、ナハントゥ村、アンナン村の七村が統合してできた村だという（注3）。
東筋村は明和の大津波後、次の九か村が統合してできたといわれている（注4）。すなわち、サーバル村、アールスン村、フナトゥ村、サキバル村、アーロスク村、ナンザトゥ村、テインゾーチ村、ウツ村、アガリスジ村の合併によるといわれている（注5）。
保里村は明和の大津波後、五つの村が統合してできた村だといわれているが、それぞれ五か村の村名は不明だという（注6）。

（注1～6）沖縄県教育委員会『竹富町、与那国町の遺跡』

（6－2）ミントゥハネマ遺跡とミントゥ按司

古老の伝承によるとミントゥハネマ按司は弓の名人で強力者であったという。ミントゥハネマはミントゥカネマ（黒島方言の力行音のハ行音化）で、カネマは鉄と関係があり、彼は黒島に鉄器をもたらした先駆的な英雄であると考えられるという（注1）。
前節の石垣島真栄里村の項で記述したように黒島から真栄里村に移住して来たという安居大主は弓と関係があり、彼は英雄伝説を背景に持っていたが、黒島のミントゥンハネマ按司も弓の名人で強力者だという点平家の落武者の影をひき倭寇の面影をもっていうように思われる。
（注1）前節の書におなじ。

Hosei University Repository

（6－3）宮里村北方遺跡群－ザンドゥ、ウブスク、フキスク、イヌムル遺跡

ザンドゥ遺跡はザンドゥ按司の居城跡で、ウブスク遺跡はウブスク按司の居城跡で、フキスク遺跡はフキスク按司の居城跡でイヌムル遺跡はイヌムル按司の居城跡である（注1）。

（注1）前節の書におなじ。

これらの按司達のなかには友好関係もあったようだが、また彼等同志の戦もあったようである。ナンザトゥ按司は前項のシントウハネマ按司と特に仲が悪かったという（注2）。ウブスク按司とフキスク按司が戦いをしたという伝承があるという（注3）。

（注2、3）前節の書におなじ。

（6－4）ナンザトゥ遺跡

この遺跡と関連するナンザトゥ按司はミントウハネマ按司を知謀で退けたと伝承されている。したがってこの遺跡はミントウハネマ遺跡より後代まで残り、ナンザトゥ村として海外文化の移入にも何らかの形でかかわりを持ってきたのではないかと遺物等から考えられるという（注1）。

（注1）前節の書におなじ。



（6－5）サキバル遺跡

この遺跡はサキバル按司の居城跡だと伝えられ明和の大津波前まではサキバル村であったが、その後、東筋村に移転統合したという（注1）。

またサキバル按司とノバル按司はお互いの館から常に弓引き競争をしていたという（注2）。

（注1、2）前節の書におなじ。

（6－6）ヴィスク遺跡

この遺跡は仲本村の東方にあり、ヴィスク按司の居城だと伝えられている。

（6－7）フカスク遺跡

この遺跡も仲本村の東方にあり、フカスク按司の居城だと伝えられている。

（6－8）ヴィスク按司、クスリチ按司（居城不明）、フカスク按司は同時代の按司だとして伝承されている。

この三按司については次のような伝承がある（注1）。

往者、仲本村近隣は前記の三按司によって統治されていた。クスリチ按司とフカスク按司はその居城の中間の原野でいつも矛と矛をぶっつけ合って戦っていた。

Hosei University Repository

次のようなフカスク按司とその妻とクスリチ按司の話がある（注2）。

フカスク按司はヴィスク按司の妻と懇意になり一晩だけ密通した。妻の浮気の噂が夫のヴィスク按司の耳にはいった。ヴィスク按司は最初クスリチ按司の所に行き、ことの真相をたずねたが、拒絶された。ヴィスク按司は自分の犯した罪を悔い自分の妻に不義の詫びをした。フカスク按司の妻は聡明な妻であったので、智謀をはたらかせて、ヴィスク按司を待っていた。ヴィスク按司はことの真相をたずね確かめに来た。フカスク按司の妻は全く関与せぬことを主張した。その証拠として昨晩は夫は漁に出て、今しがた帰り、投げ網と衣服も濡れていて、夫は漁の疲れで寝ていると答えた。ヴィスク按司はこれはクスリチ按司が犯人に相違ないと思い。再びクスリチ按司の館をたずねた。クスリチ按司の妻は愚かな妻であった。それでヴィスク按司のたずねたことに事実ではないことを話した。すなわち、自分の夫は昨晩どこに行っていたか知らないが、今朝がた帰って来たと話した。そこでヴィスク按司は一刀のもとにクスリチ按司の首を切り捨てた。

なお黒島の古謡メーキドマリユングトゥ中にニーンヌ按司を称える古謡が謡われているが（注3）。これも前期の按司の流れをくむものだと思われる。

以上の黒島の按司達を八重山歴史の上でどのようにいちづけるかいまのところ不明である。またこれらの按司達と倭寇との関係も不明である。



（注1、2）前節の書におなじ。

（注3）喜舎場永珣『八重山古謡』（下）参照。

### (7)波照間島の英雄伝説と後期倭寇

稲村賢敷は波照間島を中心とする航路は首里王府から支那の福州に至る朝貢貿易路の航路に対して裏航路にあたり、明、琉両政府の監視からはずれたために当時の密貿易路および海寇船の多くはこの航路を通ったものであろうと著書『倭寇史跡の研究』で述べている。

稲村は波照島の倭寇遺跡について前記の著書で伝ヤグ村遺跡、下田原城跡、伝シムス村遺跡の三か所をあげている。これらの三遺跡について共通しているのはいずれも外来陶磁器の青磁、褐紬陶器類がこれらの遺跡から出土していること、そしてこれらの遺跡とかかわりの深い英雄は伝ヤグ村跡は明宇底獅子嘉殿（シュクシシカドン）（注1）、下田原城跡はウヤミシャ・アガダナとして伝シムス村跡桃原（トール）家が中心的な役割を果しているとしている。

仲底善章は「八重山群雄割拠時代の波照間島における村落と英雄」（注2）で倭寇遺跡は稲村の指摘した前記の三遺跡だけにとどまらず、伝シムスク村跡の西方にある伝マシュク村跡、島の西側にある伝ミシュク村跡も加えてよいだろうとしている。そして仲底はこれらの遺跡からは倭寇との関係を裏

Hosei University Repository

づける外陶磁器が出土していると述べている。

倭寇との関連を視野にいれると下田原城跡と伝マシュク村遺跡の二つは遺跡の構造で注目されるという（注3）。両遺跡とも外敵を防備するために築きあげられているという。

遺構からみて、この外敵とは何者か不明であるが倭寇であったと考えられるという（注4）。出土している外来陶磁器から推して倭寇の集団はその遺跡を訪問し、村落の首長と取引をしたであろう（注5）と仲底善章は述べている。

（注1）稲村はミシュクシシカ殿はヤグ村の曾長であって倭寇の首領であると同書で述べている。

（注2～5）『波照間島総合調査報告書』沖縄県立博物館。

### (8)与那国島の後期倭寇の行跡と島の英雄

牧野清は著書『新八重山歴史』で八重山諸島には平家の落武者の遺跡（墓）だと伝えられる所が何か所あると述べて、与那国島では南帆安原の俗称ハイムトゥの洞窟がそうであるという。喜舎場永珣はその洞窟を大和墓といっていると述べている（注1）。

喜舎場はさらに与那国の口碑によると平家の落武者の墳墓の周囲に一七戸からなる小部落があり、



それが他の部落と結婚しなかった。これは平氏の子孫であったと言い伝えていると述べている（注2）。これなども恐らくは倭寇の行跡を平家の落武者伝説に結びつけたものだと考えられる。

（注1、2）喜舎場『八重山歴史』

宮城政八郎によると与那国には倭寇に関する伝承が数多くあるという。そしてその伝承者は自分達が倭寇の子孫であるということを隠してその伝承を話したがらないという。彼等は自分等は平家の子孫であるとか豊臣家の子孫であるとかという。

宮城は与那国島の倭寇の伝説を臨地調査などで数多く収集しつつあり、近く出版の予定があるという。

以下の記述は与那国島の女傑サンアイイソバと後期倭寇について前花哲雄『女護ヶ島』から要約して引用したものである。

海賊退治（前花は倭寇を海賊と記述している）

1、その頃から八幡大菩薩の旗を押し立て、朝鮮支那沿岸南方各地を荒らし廻っていた海賊船は八幡船として大変沿岸住民から恐れられていたのでこれを倭寇と呼んでいた。

2、この八幡船なる海賊船が絶海の孤島、与那国島に現われて久部良付近の島影に錨を降ろし上陸して久部良部落を襲った。上陸して来た二〇数名の海賊共は先ず久部良部落に侵入して食料衣類等を略奪し婦女を強姦しこれに手向った土地の按司夫婦を虐殺した。部落の中は阿鼻叫喚の地獄と泣き叫

Hosei University Repository

ぶ子供、家財を持って逃げる者でごった返した。おまけに火までつけたので大騒ぎとなった。

3、人工間題や食料問題で困っていた按司達は、今度は外敵に襲撃されてどう処置していいか判らない。彼等は島仲部落の按司の所に集った。その頃サンガイソバは未だ名もない怪力の女であるだけのもので、按司でも酋長でもなかった。

4、按司達は海賊船をどう退治するかを協議したが、武器があるわけでもない。船があれば船に乗って逆襲も出来るが船もない、しかし明日になれば又襲撃焼き討ちされて仕舞う。吟味は夜更けまで続いたが話は纒まらない。

5、サンガイソバは力もあるし、女だから何か良い考えがあるかも知れぬと言うことで、イソバが呼び出された。

6、その頃この島にはモロミで造った地酒があった。しかしどの家にも豊富にある訳ではない。桃原部落の加那按司の家にいけば少し位はある知れぬ。いや加那按司の家からだけでなく村々から地酒を集めることをイソバは按司達に要求した。

7、イソバは集められたモロミの地酒を二斗甕に入れ、これを抱え担ぐため縄でしっかり結いしめた。紐が握れるようにした。翌日この酒甕を担ぐため太い黒木の芯のある重い棒をわざわざ準備してその棒でその酒甕を担げと指示した。明くる日、昨日襲撃された久部良部落近くの久部良古石付近の台地に酒とお膳を運ばし会見場をしつらえさせた。



8、イソバは使者を仕立て、海賊船に会見を申し込んだ。

9、古石の船の見える所で会見するからみんなそこへ酒甕とお膳を運べ。酒甕を担ぐ五、六名の者は私に付いて来なさい。その他の人はこちらから合図のあるまでアダンの陰で隠れているよう指示した。五、六名の屈強な若者に甕を担がせて、婦女子の忌み嫌う久部割(クブラバリ)付近の古石台地に行った。

10、敵は毒が入っているから飲まぬと酒甕を返した。イソバは他のシャコ貝を取ってこれに軽々と二斗甕から一杯注いで、一息でぐっと飲んだので敵も毒入りでないと認めて飲んだ。

11、イソバは風呂敷包のお膳を拡げ、お膳の上にあった握り飯を一つ取ってぽりぽり食べて敵にも勧めた。

12、敵達は勧められた握り飯を食べようとするが固くて食べられない。イソバの食べているのは黒こげの栗飯であり、相手のものは拳大の川石であった。

13、腹ごしらえしたイソバはつと立ち上がった。黒檀の九尺棒があったのを振り回して敵の大将を薙ぎ倒した。敵も、腰の日本刀を抜き、立ち向かったが天下無敵の怪力イソバの打ち下ろし振り回した黒檀の太棒を食らってどっと横倒しになった。

14、アダンの陰に隠れていた按司達や十名の者が踊り出て応援した。

15、こうして海賊は親分を初めみんな惨殺された。

16、イソバを中心に按司達は凱歌をあげた。イソバ女のお蔭で海賊船を退治出来たのだった。

Hosei University Repository

17、久部良部落では海賊船の退治が出来たことを記念して、毎月十一月のかのえさるの日には久部良祭として盛大な海神祭（注1）を今も行っている。

（注1）この海神祭を与那国方言でマチリ（カンブナガ）という。

## おわりに

以上では私は八重山諸島の平家伝説と倭寇の行跡について先人の研究業績を整理することを中心にして記述した。

本稿では論及はさけたがオヤケアカハチに代表される八重山諸島の英雄達と倭寇との関係がどうなのか不明であり、今後の研究に待たなければならない。オヤケアカハチは外国人と波照間島の婦人である同島の神司との間に生まれた人であるという伝承がある（注1）、宮野賢吉「アカハチの乱と八重山の支配権」でもこのことは報告されている（注2）。

（注1）上間貞俊、小底致市『大浜村の郷土史』ではオヤケアカハチの父はポルトガル人だとしている。

（注2）二〇〇〇年九月七日「八重山毎日新聞」。宮野はオヤケアカハチの父はオランダ人としている。

『球陽』の記録によると廃藩置県以前の沖縄の東方の太平洋を毎年何隻もの外国船（スペイン、オランダ、フランス、イギリス、アメリカ各国）の来琉があったようである。それらの船は沖縄先島（宮古、八重山）への寄港も絶えず行われていたようである。

柳田国男はかつて沖縄本島の東海岸の船の来航の調査の重要性を指摘したことがあり（注1）、八重山西表島の東海岸にある古見村のことについても言及し（注2）、多分にいわゆる倭寇時代の船の往来によって島の発見の端緒を得たものかと思うと『海上の道』で記述している。

宮古の英雄仲宗根豊見親と八重山諸島の関係も船の往来を考慮することがまた問題の解決への糸口を与へてくれるものだと思われる。

（注1、2）宮良当壮編「月刊琉球文学」。第一号巻頭言の柳田論文。